

# うめくさ-13

## 「本草綱目」の図から雑草らしきものを拾う

「うめくさ 10」で触れたように、李時珍の「本草綱目」は日本の博物学に極めて大きな影響を及ぼした。いわゆる漢方薬の集大成であるが、薬物の多くは植物性のものであったから、深山幽谷に生じるものばかりでなく、中には当時の人々の生活の周りに普通に见られる植物も少なくなかった。すなわち、雑草も掲載されていたことになる。江戸時代にいくつも刊行された「本草綱目」の和刻本では各分冊のはじめにその冊に出てくる材料をまとめて図示することが普通だったようだが、全巻を通して図だけをまとめた「本草綱目図」というものもある。この版の出版の経緯は以下のようなものである。

「1714 正徳4：五月、稻宣義（若水）校、『（新校正）本草綱目』、序目、巻1152、ならびに付録刊了。……この版刻は正徳二年にはじめこの年完成する。承応二年版による改刻で、輪郭を改め、訓点を訂正し、李時珍の原本に本文を脱漏した桂（草部）、没離梨（果部）などを、本文に做って作文し補入してある。……付録の一は、李時珍の『脈学奇経八脈』、76丁。二は『本草綱目図』、二冊、161丁、1110図。（上野益三 日本博物学史 平凡社 p.308 1973）

筆者の手元には上記付録二の一部と思われる「本草綱目図 巻上」があって、序文が以下のように漢文で書かれている（図-1）。

従来図繪飾ノエト為ス 未タ其ノ形似タルヲ析ツニ暇アラズ 是ヲ以テ博物ノ君子毎ニ櫛梨橘柚之疑ヒ多シ 茲ノ集詳ニ考ヘ互ニ訂シ肖ニ疑眞ニ逼ル遐方ノ異物ト雖モ図ヲ按 シメ索ム可シ奚ソ第多ク其名ヲ識已也

この冊子から、当時すでに雑草であったと考えられるものから24点の図をぬきだした（図-2）。「本草綱目」に記載された生物を日本の生物に充てる作業は江戸時代を通じて、日本の博物学（本草学）の主課題であって、多くの学者がそれに没頭した。現在では「国訳本草綱目（春陽堂）」として手にはいるが、その1931年の旧版では最後の本草学者と言われた白井光太郎博士、植物学の牧野富太郎博士、1974年の新註増補版では生薬の木村康一博士、植物学の北村四郎博士らが知恵を絞って李時珍の記述した植物の正体を追究した。図に付した、カタカナで記した和名は諸先生の考察の結果である。

和名と対比して図を見ると、なるほどと肯け

るものもあれば、似ても似つかぬものもある。しかし、明という時代を考えると、総体としてはよく出来た図と言えよう。日本の植物への比定に際しては図より記述が重視された。イチビの記述は、「葉は大きく、桐葉に似て團くして尖がある。六七月に黄色の花を開く。実は半磨の形のやうで歯があり、嫩いうちは青く、老ゆれば黒くなり、中の子は扁たく黒く、形状は黄葵子のやうだ。（国訳本草綱目 第五冊 草部 p.139）」と、図より明快にその形状を示している。

植物図に高い精度を要求し、自らも精巧な植物図を沢山残された牧野富太郎博士は「本草綱目」の図にも厳しい注文をつけ、正確な図を整備しようと考えた。

・・本草綱目ニ就テ此ノ如キ図説ヲ作ラント企テタ人ハ是レ迄マダ世間デハ聞カナイカラ此挙ハ今回ガ始メテデアラウ、元来此綱目ニ添ウタ図ハアルガ其レヲ本草綱目ノ図譜デゴザイト銘打ッテ出スニハ余リニお粗末ナモノデアル事ハ其レヲ一見シタ人ハ誰デモ其点ニ異存ハナカラウ

サテ此レカラ出サウトスル図ヲ悉ク創作ノ原図ニスル事ハ実ニ容易ナ業デハナクドンナニシテモ其レハおいそれトチョットハ出来ヌわざデアル、故ニ茲ニハ百家ノ書カラ其良図ヲ抄出シテ間ニ合セル、サウ為ナケレバ此仕事ヲ運バセテ行ク事ハ出来ヌ、然シ原作図モ出来ル限リ之レヲ製シテ其間ニ交ヘ出ス事ハ勿論デアル・・（本草綱目植物図説、本草 創刊号 p.11-17, 1932）

牧野博士の「本草綱目植物図説」は数回の連

載で終わり、完成しなかった。近年中国において、「中国本草図録」や「原色中国本草図鑑」などが刊行されるに至った。本草綱目はまだ生きているということであろう（も）



図-1 本草綱目図 巻上.

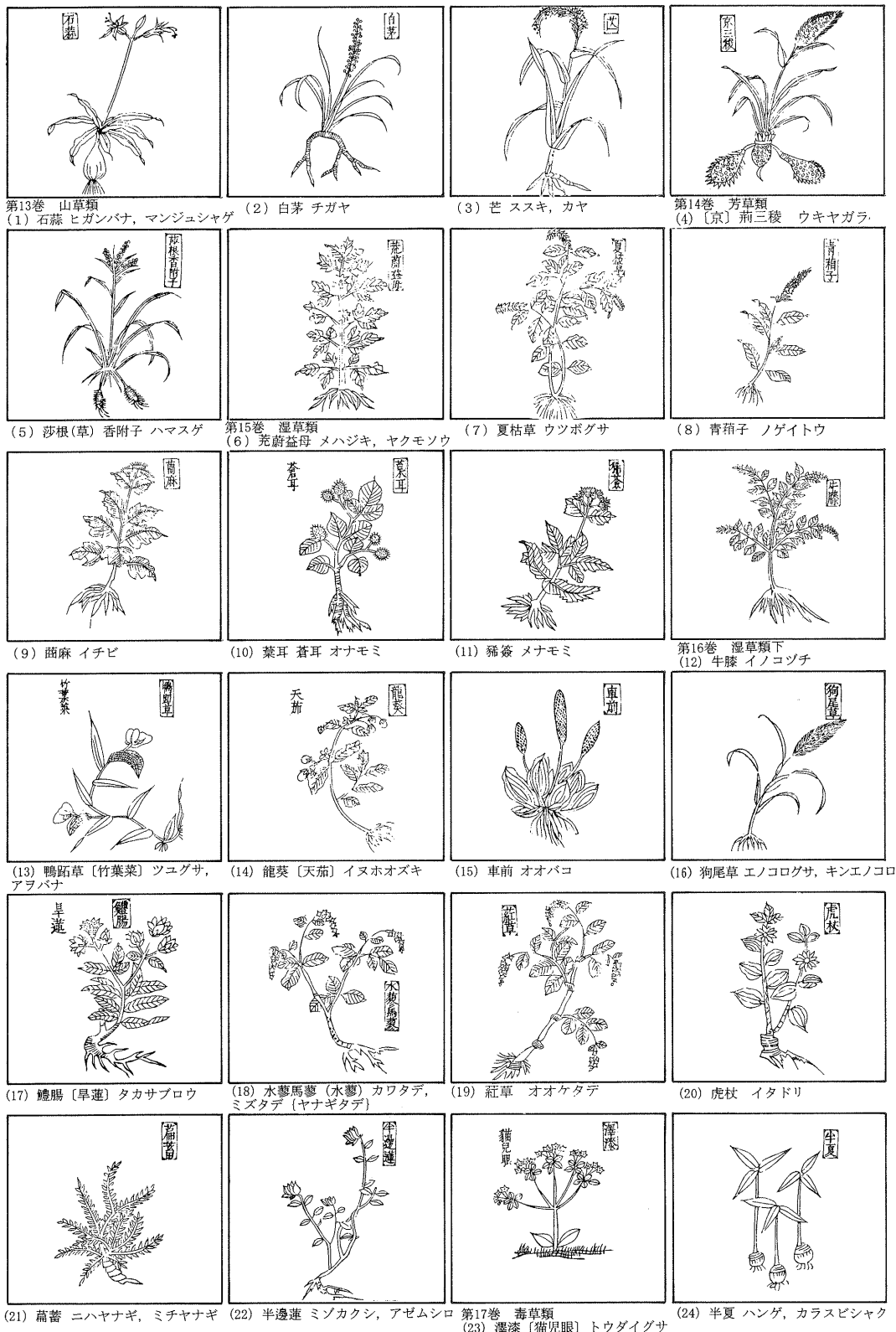


図-2 「本草綱目図 巻上」で雑草と考えられる図  
カタカナ和名と( )内は「国訳本草綱目」。( )内は「本草綱目図 巻上」での文字, { }内筆者注。